

Title	3.共同利用研究会(V 共同利用研究)
Author(s)	
Citation	霊長類研究所年報 (2000), 30: 145-152
Issue Date	2000-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/165310
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

3. 共同利用研究会

「ニホンザルの食物選択と採食競合」

日 時：1999年7月8日(木)

場 所：霊長類研究所大会議室

参加者：約30名

本研究会は、計画課題「ニホンザルの食物選択と採食競合」を立ちあげるにあたって研究方向の設定を目指して行われた。ニホンザルは多様な環境に生息するが、それぞれの環境の中で、必要な栄養を摂取し、個体を維持し、かつ繁殖していくには、うまく食物を選択し、利用していかなければならない。この古くからの問題を、食物の摂取が様々なテクニックを用いながら行われ、個体間の競合を緩和するよう行われているのではないかとといった観点から、見直してみたらというのが計画者の問題提起であった。

研究会のプログラムは

1. 上野有理(京都大) ニホンザル新生児における採食行動の発達
2. ジェームス・ワキバラ(京都大) Seasonal trends in food and soil consumption among free-ranging provisioned Japanese monkeys at Arashiyama
3. 竹元博幸(京都大) 食物の「選択性」と「二次代謝成分」— チンパンジーの研究から
4. 岩本俊孝(宮崎大) 栄養摂取、生存と繁殖の限界
5. 中山裕理(北海道大) 体サイズが採食速度と餌選択に与える影響
6. 丸橋珠樹(武蔵大) 群れサイズが群れ間競合に及ぼす影響について
7. 今木洋大(山梨県環境科学研究所) 日光・今市地域におけるニホンザルの食性と生息環境
8. 小金沢正昭・奥村忠誠(宇都宮大) 亜高山帯に進出した群れの食性、環境選択と群れサイズ
9. 船越美穂(京都大) 中部山岳地帯に生息するニホンザルの夏季の樹皮食と土地利用

コメンテーター：マイケル・ハフマン、
中川尚史、室山泰之

以下、発表された話題を紹介する。

子供は母親から採食テクニックを学ぶのだろうかという疑問を、新生児から母親の採食している物に対する関心という観点から分析したいという発表があった。母親の食物や口の臭いを嗅ぐ行動やそれに口を近づける行動がかなりの期間続くことから、学習にはかなりの期間がかかるのではないかと指摘された。

植物は被食からの防衛のために毒物や消化阻害物質を出すといわれるが、ニホンザルの土喰いはこのような防御物質を中和するために役立っているという仮説が立てられている。防御物質を多く含んでいる葉を食べる頻度と土喰いの頻度が相関しているか調べられ始めた。今のところ結果は仮説に否定的であり、土喰いに対して新たな疑問が生まれた。

チンパンジーの葉食に選択性があるのかという検討がなされた。その結果、葉の現存量と採食量に相関がなく何らかの選択がおこなわれていることが示唆された。その選択の基準は、蛋白と灰分に富みタンニンが少ない葉を選んでいるということだった。チンパンジーの葉食は確かに新しい問題である。

サバンナヒヒの研究で、生後70週までの個体が、エネルギーおよびタンパク質の取り込みを効率的に行っている度合いを線形計画法によって測ると、効率的採食の度合いは個体差が大きいことに端を発して、この個体差がそれ以後の繁殖成功度に相関があることが見つけられたという報告の紹介があった。その解釈は、初期に効率の良い採食技術を獲得した個体は、その技術を用いて将来にも効率よく採食したのだとされた。

下北半島のニホンザルで、冬季のヤマグワの樹皮と冬芽の採食に関するオトナと子供の採食選択の違いが明らかにされた。同じ木を採食のために繰り返し訪問する場合、オトナは早くから樹皮食をするようになるが、子供は複数回目の訪問でも冬芽を採食し続ける。これは子供はオトナと比べて樹皮を1度に少量しか口に入れることができないため、樹皮食が子供にとって採食効率が悪いためであるという。さらにこの傾向は、子供は冬芽を求めて細かい枝先などにも素早く移動できるが、オトナはできないことによっても強められている。しかし、体重に対する、時間当たりの採食

率は、オトナも子供も有蹄類のものより大きい。これは、ニホンザルが頬袋を利用するためだろう。

以下の話題は、採食競合、採食場選択、群間競合といった問題に関するものである。まず、群の個体数の増加は、個体の食物選択の幅を狭めるという報告があった。高崎山群では初期の餌付けによって急激に出産率が上がったが、その後、個体数増加に加えて給餌制限も行われて、毎年出産率は減少の一途をたどっている。出産率の変化過程を説明するためには、自然界が供給する餌の量と質の変化を考慮する必要がある。すなわち、給餌量が多くても個体数が増えれば、1個体あたりが利用できる自然界の良質の餌が減少する。給餌量が減少すればその効果がさらに増幅される。現在、高崎山の群れは、森林も破壊するほどのぎりぎりの線で生活している。

採食選択に群れサイズが影響を与えるという報告があった。果実季には、大きい群れは小さい群れと比べ移動速度が大きく果実食の割合が高い。小さい群れはその反対で葉食の割合が高い。しかし、大きい群れは広く遊動する結果として、群れ間の出会いが増えている。葉食季には、群れサイズの違いによるこのような移動速度の違いがない。小さい群れは大きな群れの分布の隙間に生存できる場合もある。

日光の2つの自然群の観察。標高に沿って季節移動しホーム・レンジは20平方キロ以上と広い。麓から見ると、何処でも単子葉草本をたくさん食べている。しかし、低いところでは果実をかなり食べている。ホーム・レンジ内にある針葉樹の植林地域と落葉樹地域と比べると、針葉樹林では、サルは林縁から150mしか利用しない。落葉林では、採食と休息のため林縁から奥まで利用する。

日光の戦場ヶ原は近年はサルは棲んでいなかったが、またサルが生息するようになった。この新しく出てきた群れが分裂を起こしたが、それは果実季に起こった。これは、おそらく果実に対する競合が強いためだろう。

中部山岳地帯で、2つの近接する群れで、カラマツの樹皮を剥ぐ被害が違う原因を採食生態から調べている。樹皮食被害を引き起こす群れでは、果実の多い落葉広葉樹林の面積が少なく、食物の利用可能度の違いがこの被害の違いを引き起こし

ているのであろう。

以上のように、最初の数題の話題は採食技術にいくつかの新しい展開があることを示唆する発表であった。また、後半の話題は、その森の採食場としての価値や、群れサイズ、群間関係などが採食場選択に影響を与えるという問題提起だった。

(文責：森 明雄)

「霊長類のストレス反応とそのメカニズム」

日 時：1999年11月26日（金）

場 所：京都大学霊長類研究所大会議室

参加者：約50名

プログラム

11月26日（金）

セッション1

司会：中道正之（阪大・人間科学）

友永雅己（霊長研）

「ニホンザル新生児におけるストレスへの反応」

川上清文（聖心女子大・文学）

「母体のストレスが胎児の神経発達に及ぼす影響—調査方法と尺度の開発—」

上井稔子・佐藤千史（東京医科歯科大）

「チンパンジー（*Pan troglodytes*）にとって認知実験はストレスか？—認知実験中のパフォーマンスと生理指標の関連について—」

友永雅己・鈴木樹理・大蔵 聡（霊長研）

中村 実・阿部恒之

（資生堂ビューティーサイエンス研）

セッション2

司会：友永雅己・鈴木樹理（霊長研）

「木片遊具とストレッサー：環境エンリッチメントの評価」

山根 到（東京都神経研）

鈴木樹理・友永雅己・大蔵 聡（霊長研）

「サル類のストレスモデルと神経・免疫・内分泌相関」

寺尾恵治（感染研・筑波霊長類センター）

「Interferonによる鬱の発生機序に関する研究」

錫村明生（奈良医大）・
伊藤由里（藤田保健衛生大）・
大蔵 聡・鈴木樹理（霊長研）

セッション3

司会：大蔵 聡・鈴木樹理（霊長研）

「栄養ストレスと生殖機能」

東村博子・前多敬一郎
（名大院・生命農学研究科）

「シバヤギの視床下部神経活動におよぼすエンドトキシン投与の影響－視床下部電気活動を指標としたストレス評価系の確立に向けて－」

武内ゆかり・森 裕司・西原真杉
（東大院・農学生命科学研究科）

「低栄養ストレスによるパルス状黄体形成ホルモン分泌の抑制－ニホンザルモデルにおける検討」

大蔵 聡・鈴木樹理（霊長研）・
武内ゆかり・森 裕司・西原真杉
（東大院・農学生命科学研究科）・
東村博子・前多敬一郎
（名大院・生命農学研究科）

総合討論

世話人：鈴木樹理・大蔵 聡・友永雅己

本研究会は、平成8～10年度に実施された計画課題「霊長類におけるストレス反応に関する研究」のまとめとして開催された。3年間の目標として、物理的のみならず、霊長類に特有な心理的、社会的ストレスに対する生理学的変化や心理学的、行動学的変化の分析、定量を試みることに、およびストレス反応時の神経・内分泌・免疫系の相互のかかり合いを解明することを掲げ、この目標に沿っておこなわれた研究の成果が発表された。

セッション1は、ヒトを対象とした研究法、研究結果がチンパンジーやマカクに演繹可能かという視点をもって発表された。川上が行動と血中のコルチゾルを指標として、ニホンザル新生児におけるホワイトノイズのストレス軽減効果について調べ、ヒト新生児と同様に行動面で差が見られることを示した。上井は、母胎に負荷されたストレスが胎児の神経発達に及ぼす影響を調べるため

に、マカクを対象に胎児心拍の測定と出産後母子の行動を観察し、胎児心拍数は神経発達の指標となり得るが、胎内日数の把握が必要であることを示した。友永は、ヒトの作業ストレス負荷実験同様に、認知学習実験によってチンパンジーもストレスを負荷されるかどうか、いくつかの行動と生理的な指標を用いて検討した。その結果、性周期に対応してストレス反応に変化が生じている可能性が示唆されたことを紹介した。

セッション2では、動物福祉につながる実践的研究の試みと神経・内分泌・免疫相関（クロストーク）をキーワードとした研究が発表された。山根は、マカクのケージ内木片遊具の効果を行動及び生理的变化を指標として調べた。遊具導入により、自己指向性行動が選択的に抑制される可能性と生理面でのデメリットは比較的小さいことが示された。寺尾は、自ら発見した新しいストレス関連リンパ球抗原U5を対象としたサル類での研究成果を紹介した。錫村は、ストレスに起因する鬱状態などの精神障害、気分の変調などの機能調節因子を、アカゲサルにインターフェロン α を投与し探索した結果、これによって惹起される鬱状態にはドバミン系の抑制が関与していることを示した。

セッション3では、神経内分泌領域の研究が発表された。東村はラットを用いた実験から、絶食ストレスによる性腺機能の抑制に関わる脳内メカニズムについてMCHやmotilinに関する新しい知見を中心に述べ、さらに絶食ストレス負荷時に変化する栄養因子のうち、グルコースおよび遊離脂肪酸の利用性の低下が誘因となって生殖機能抑制を引き起こすことを示した。武内は、ストレス反応の中核制御機構に関してシバヤギを用いた感染症罹患時における実験モデルの作出の試みを紹介し、LPS投与によりシバヤギに定型的な病態行動の発現と一連の病態生理学的変化を誘起し得ることを示した。大蔵は、東村、武内らとの共同研究によるニホンザルの低栄養ストレスによる生殖機能の抑制機構を、パルス状LH分泌およびこれと同調して上昇する多ニューロン発射活動(MUA)の変化から示した。

研究会には所内・外から約50名の参加者があり、ストレス研究に対する関心の高さが窺われた。様々な分野の研究者が集まった成果として各

セッションで興味深い発表と、その分野にとどまらずいろいろな分野からの活発な討論が行われ、共同利用研究課題として行われた3年間に、霊長類を対象としたストレス研究がかなり進展したことが示された。それぞれのセッションのみならず最後の総合討論でも、2000年度から始まる次の3年間の研究の進め方についての意見、討論が活発に行われた。尚、各発表の詳細についてはこの研究会の要旨集を参考にされたい。

(文責：鈴木樹理)

「霊長類の発生・発達・加齢に関する研究」

日時：1999年12月9日(木)～10日(金)
場所：京都大学霊長類研究所1階大会議室
参加者：約40名

プログラム

12月9日(木)

座長：大石高生(電子技術総合研究所)

「霊長類大脳皮質において領野特異的に発現する分子の検索と解析」

渡我部昭哉(基礎生物学研究所)

「発達期サル脳におけるTrkBサブタイプ間の相互作用」

大平耕司(京都大学霊長類研究所)

座長：林 基治(京都大学霊長類研究所)

「サル中枢神経系の生後発達における成長関連タンパク遺伝子の発現」

肥後範行(電子技術総合研究所)

「ドーパミンによるサル大脳皮質でのシナプス維持機構」

岡戸信男(筑波大学・医)

座長：小嶋祥三(京都大学霊長類研究所)

「老齡ザルの前頭葉における認知機能低下の特徴

(1) Position Reversal」

土田順子(京都大学霊長類研究所)

「老齡ザルの前頭葉における認知機能低下の特徴
(2) Delayed Response」

久保南海子(日本女子大学・人間社会)

「霊長類における身体運動の初期発達比較」

茶谷 薫・友永雅己(京都大学霊長類研究所)

12月10日(金)

座長：清水慶子(京都大学霊長類研究所)

「マカク付着系細胞における加齢メカニズム」

清水祐子(東京大学・理)

「サル死体生殖器官由来配偶子を用いた胚生産の検討」

細井美彦(近畿大学・生物理工)

座長：濱田 稯(京都大学霊長類研究所)

「加齢に伴い生じる動脈硬化症は歩行法と関連するか」

東野義之・東野勢津子(奈良県立医大)

「チンパンジー思春期の成長と発達」

鶴殿俊史(三和化学研究所)

「ニホンザル椎骨の加齢変化」

郡司晴元(日本モンキーセンター)

平成9年度～11年度に実施された計画研究「霊長類の発生・発達・加齢に関する研究」のまとめとして本研究会は開催された。第1日目は脳と行動関係の研究成果が報告された。霊長類の大脳皮質運動野で強く遺伝子発現しているGDF7、脳由来神経栄養因子(BDNF)の受容体(TrkB)のサブタイプ分子類、GAP43、SCG10等の神経線維伸長に関わるタンパク質等の胎生期から成熟期までの発達が主にマカクサルの大脳皮質を用いて明らかにされた。その結果それぞれの機能分子の遺伝子が、時間軸に沿って大脳皮質に発現してくること、神経細胞の生存や回路網形成にこれらの分子の発現が深く関与する可能性が示された。また前頭前野のシナプス形成ヘドーパミンが関与することがドーパミン受容体の拮抗薬による研究から明らかにされた。行動研究では、図形や位置弁別能力の加齢にともなう変化が老齡ザルを用いて調べられ、若年個体に比べ老齡ザルでは能力が低下することが報告された。さらにニホンザルの登攀、下降運動の発達が調べられ、時期に対応し

てロコモーションがより精緻かつ円滑になることが明らかにされた。第2日目は培養細胞の発達加齢の研究、血管系や骨加齢の研究とチンパンジーの成長に関する研究成果が発表された。マカクサルの線維芽細胞の経時的細胞変化が調べられ、ヒトと同様に継代に伴う細胞の老化が見られること、ニホンザル卵子を体外培養した結果、成熟卵にいたる卵子は他の動物種に比べて少ないこと等が示された。マカクサルの動脈内カルシウム含量の加齢変化をプラズマ発光法で分析した結果、24才以上になるとカルシウム含量が増加し、これはヒトの結果と一致していることが報告された。ニホンザル腰椎の加齢による形態変化を追跡するとともに骨密度変化をpQCT（末梢骨定量的CT）によって調べた結果、椎体の頭側面と尾側面がなす角度と年令の間に相関関係があることが示された。またチンパンジーにおける思春期発育を中心にした体重、精巣重量や性ホルモンの年令変化や栄養状態が初潮発来（初潮）の年令におよぼす影響などについて貴重なデータが報告された。

（文責：林 基治）

「情動の脳内機構」

日時：2000年2月17日（木）～18日（金）

場所：京都大学霊長類研究所大会議室

参加者：約60名

プログラム

2月17日（木）

「大脳皮質第一次体性感覚野ニューロンの侵害受容機構」

岩田幸一（大阪大学・歯）

「前帯状回の報酬予期、痛み（痛みの予期）ニューロン」

小山哲男（大阪大学・医、京都大学霊長研）

加藤啓一郎・三上章允（京都大学霊長研）

「報酬情報と前頭連合野のニューロン活動」

渡辺正孝（東京都神経科学総合研究所）

「島・中脳中心灰白質間の神経結合」

有國富夫・松川睦・山下品子・

大島秀規・酒匂弘子（日本大学・医）

「味覚識別における情動発現」

西条寿夫（富山医科薬科大学・医）

2月18日（金）

「情動行動の性分化に及ぼす内分泌攪乱化学物質の影響」

粟生修司（九州大学・医）

「大脳辺縁系における情動発現機構」

小野武年（富山医科薬科大学・医）

「動物による神経科学研究にも“情動”概念は有用である」

磯 博行（兵庫医大）

指定討論：久保田競（日本福祉大学）

世話人：三上章允・友永雅己・中村克樹・

脇田真清

霊長類は大脳新皮質が拡大し、高次の脳機能がよく発達した。高次脳機能というとき認知、記憶、判断、思考、言語など論理的、理性的な側面が重視されがちである。しかし、高次脳機能は常に、動機づけ、欲求、嫌悪など情動とのバランスの上に実現している。認知、記憶、判断など大脳皮質の担う理性的機能の理解が少しずつ進むにつれて、情動機能との関連から高次機能を検討する意義も見直されはじめている。そこで平成11年度はこの情動の問題を取り上げ、主として霊長類を対象として行われた解剖学（有國、岩田）、生理学（岩田、小山、渡辺、西条、粟生、小野）、心理学（磯）の研究の最近の成果を持ちより、討議をした。情動の生理学的研究を行うとき、ニューロン活動など生理学的指標と比較されるべき情動の条件は行動学的に評価された概念に対応付けながら研究を進める必要性を強調する意見と、情動の脳内の機構は脳をブラックボックスとした個体の行動から定義される情動の諸概念と必ずしも対応しないのではないかと意見が出され、活発な議論となった。この点については結論には至らず継続して討論することとなった。

（文責：三上章允）

「バン属の毛づくろい」

日 時: 2000年3月9日(木)~10日(金)
場 所: 京都大学霊長類研究所大会議室
参加者: 約50名

プログラム

3月9日(木)

類人猿の毛づくろい

座長: 加納隆至(霊長研)

古市剛史(明治学院大・一般教育部)

1. 「研究会の目的とチンパンジーの毛づくろいパターン」(ビデオ紹介)

西田利貞(京都大・理学研究科)

2. 「チンパンジーの毛づくろい」

中村美知夫(日本モンキーセンター)

3. 「ビリヤの毛づくろい」

加納隆至(霊長研)

4. 「ゴリラの毛づくろい」

山極寿一(京都大・理学研究科)

5. 総合討論: アフリカ類人猿の毛づくろい

加納隆至、古市剛史(司会)

3月10日(金)

真猿類の毛づくろい

座長: 山極寿一(京都大・理学研究科)

西田利貞(京都大・理学研究科)

1. 「南米の毛づくろいするサルしないサル」

伊澤紘生(宮城教育大・環境研)

2. 「シラミ取りとしての毛づくろい」

田中伊知郎(霊長研)

3. 「毛づくろいのエコロジー」

中川尚史(神戸市看護大・看護)

4. 総合討論: 毛づくろいは種間でどのように違うのか?

西田利貞、山極寿一(司会)

ディスカッサント:

黒田末寿(滋賀県立大・人間文化)、伊谷原一(林原自然科博・準備室)、五百部 裕(京都大・理学研究科)、橋本千絵(霊長研)、鈴木 滋(京都大・理学研究科)

世話人: 西田利貞・加納隆至・上原重男

毛づくろいは、霊長類の健康維持に欠かせないだけでなく、社会関係の維持や取引という重要な機能をもっていると考えられている。最近では、毛づくろい行動の発展としての言語起源論まで出現した。しかし、霊長類には毛づくろいをよくする者から、ほとんどしない者までその重要度は種によって異なるようである。また、同時に相互を毛づくろいする種から、一方的にしか毛づくろいしない種まで、毛づくろいのパターンにも多様性がみられる。種内でも地域によって、同じ地域でも季節的に、毛づくろいの頻度は大きな差異がある。こういった相違は、どうして起こるのだろうか。チンパンジーとビリヤ(ボノボ)だけでなく、さまざまな種の毛づくろい行動の比較を試みることによって、霊長類における毛づくろいの多様性を再認識し、今後の研究発展に役立てる目的で本研究会は開催された。参加者は約50名で、所外からの参加者も含め、活発な討論が行われた。

第1日目は、アフリカに生息する大型類人猿3種における毛づくろいについて、それぞれの研究者が報告を行った。チンパンジーでは、同時に相互を毛づくろいすることがしばしば観察されるとともに、多くの個体が集まって毛づくろいするグルーミングクラスターや、毛づくろいの際に他個体の体を搔くソーシャル・スクラッチといったことが観察されている。これらのトピックも含めて、タンザニア・マハレ山塊国立公園に生息するチンパンジーについて、ビデオを用いて毛づくろいを紹介するとともに、特徴的な毛づくろいの定量的な分析が行われた。さらに、グルーミングクラスターのパターン分析について発表された。ビリヤおよびゴリラについても、毛づくろいの特徴について定量的な分析が行われた。ビリヤでは、毛づくろい相手がメスのときには毛づくろい時間が短い傾向があるが、毛づくろい相手がオスの場合にはそのような傾向はみられなかったこと、ゴリラでは社会的毛づくろいの頻度が非常に低いこと等が発表された。

第2日目は、真猿類における毛づくろいについて、それぞれの研究者が報告を行った。新世界ザルでは、手・指の形状からにせの母指対向性がみられる。毛づくろいの頻度に種間差がみられ、ホエザルはほとんど毛づくろいを行わない。また、旧世界ザルにみられる社会構造のほとんどが新世

界ザルにもみられることから、毛づくろいの種間差には、社会構造が直接反映されているのではなく、むしろ形態の差異がより影響している可能性が指摘された。ニホンザルについて、衛生的機能の側面から毛づくろいを分析し、毛づくろいによって除去するシラミ卵数を推定した。毛づくろいのもつ衛生的機能の側面とも関連してくるが、毛づくろいに投入できる総量と質は、生態学的要因に影響されうる。実際に、環境要因の異なる地域間での毛づくろいにおいて、総量(時間)および質(方向性)に実際に差異がみられている。

総合討論では、毛づくろいのもつ衛生的機能という側面をふまえることが、今後の研究では必要になることが指摘された。また、社会的コミュニケーションの手段として毛づくろいを捉えたとき、毛づくろいの種間差は、社会関係の違いを反映している可能性が示唆されるとともに、地域的特殊性も考慮する必要性が指摘された。

毛づくろいのみならず、行動の種間比較を行うためには、その種における特徴を把握することがまず必要である。しかしながら、毛づくろい一つをとってみても、同一種内での地域差や、一調査地の同一集団であっても時期による違いもみられた。こういったハードルをクリアしながら、できるだけ統一された比較可能な方法を用いて、様々な種における行動研究を行う必要がある。パン属以外の霊長類にも対象を広げながら、今後数年にわたってパン属の行動の詳細な比較研究を進めていきたい。

(文責：加納隆至)

第29回ホミニゼーション研究会 「性の先史学」

日時：2000年3月17日(金)～18日(土)

場所：京都大学霊長類研究所大会議室

参加者：約50名

プログラム

3月17日(金)

第1部 性の進化を考える

座長：上原重男(霊長研)

1. 「性の適応的機能と異なるものへの好み」

矢原徹一(九州大・理学研究科)

2. 「社会的結びつきと性行動：進化生物学的理解をめざして」

松村秀一(霊長研)

第2部 性研究の展開、その意義

座長：山極壽一(京都大・理学研究科)

3. 「セックスと愛の相克」

榎本知郎(東海大・医学部)

4. 「人間の性研究を考える」

佐々木敏裕(朝日新聞大阪本社・科学部)

5. 「男と女の二元論を超えて：ジェンダーの多元性の問題」

棚橋 訓(慶応大・文学部)

3月18日(土)

第3部 人間の性にいたる前史

座長：加納隆至(霊長研)

1. 「同性間の性行動と異性間の性行動」

竹ノ下祐二(京都大・理学研究科)

2. 「父性の成立と性の変容」

山極壽一(京都大・理学研究科)

第4部 類人猿および古代人の性のかたち

座長：本郷一美(霊長研)

3. 「ボノボの性典」

古市剛史(明治学院大・一般教育部)

4. 「死者の埋葬における性のありかた：考古学の視点」

清家 章(大阪大・文学部)

第5部 総合討論

座長：清水慶子・片山一道(霊長研)

問題提起 「人間の性をユニークたらしめるもの」

栗田博之(東京外国語大学)

世話人：片山一道・川本 芳・清水慶子・

松村秀一・本郷一美

ある意味で性の問題は、もっとも人間くさい部分なのかもしれない。同時に研究の方法論が、もっとも確立しにくいテーマでもあろう。そうした人間の性の問題にアプローチするために、たんなる性行動の進化という側面にとどまらず、さまざまなトピックスを集めるべく、できるかぎり多

方面の講演者に話題提供を依頼した。かぎられた日程であるために、おのずから盛りこめる内容を限定せざるをえなかったが、それでも当初の目的は十分に達成できたと思う。

第1部では矢原徹一氏と松村秀一氏が進化生物学の観点から、広く生物、あるいは霊長類の性をもつ適応的意義について最新の研究成果を披瀝した。第2部では榎本知郎氏、佐々木敏裕氏、棚橋 訓氏による話題提起をもとに、霊長類の性研究と人間の性研究の間で、なにが違い、なにが不調和音をもたらすのか、はたして共通の土俵で共通の方法論が可能なのか、などの問題を議論した。第3部では竹ノ下祐二氏と山極寿一氏が、ことにゲイ行動と父性の問題を切り口にして、霊長類の性研究が人間の性の問題を考える有効な手段となりうることを示した。そして第4部では古市剛史氏がボノボについて、清家章氏が古代人の埋葬について、新しい性研究のパラダイムを提示するべく意欲的な報告をした。

各部での相互討論、そして総合討論の結果、霊長類の性とジェンダーの研究にはテクニカルな問題などにおいて、まだまだ多くのハードルが存在していることが明らかになった。今後、ふたたび学際的なシンポジウムを開催することによって、さらなる展開がまたれる。

(文責：片山一道)